

どんな調査・研究が評価されるべきか
レポートおよび卒論・修論の書き方

How to write the Report and the Thesis

—Some comments for the under and graduate students—

寺島 隆吉

TERASIMA Takayosi

- 1 はじめに
 - 2 なぜワープロで書くか
 - 3 中間レポートをどう書くか
 - 3-1 課題図書と中間レポート
 - 3-1-1 まず「引用」「説明」を書き分ける
 - 3-1-2 なぜ「最低一つの疑問」を付けるのか
 - 3-1-3 なぜ「小見出し」を付けるのか
 - 3-2 映像資料と中間レポート
 - 3-2-1 「引用」「要約」から「疑問」への飛躍
 - 3-2-2 「要約」で欠かしてはならないこと
 - 3-2-3 インターネットで検索する際の留意事項
 - 4 最終レポートの書き方
 - 4-1 「異文化理解講読」の場合
 - 4-2 「異文化理解」の場合
 - 4-2-1 なぜこのような基準をもうけたか
 - 4-2-2 最終レポートの書式モデル
 - 4-2-3 冒頭に「英語要約」をつける理由
 - 4-3 「英語科教育法」の場合
 - 4-3-1 英音法の基礎を身につける
 - 4-3-2 何を「最終レポート」で書くか
 - 4-3-3 英文法の基礎を身につける
 - 5 評価における「量」と「質」
 - 5-1 英語にとって「評価」とは何か
 - 5-2 評価と「量」を考える
 - 5-3 評価と「質」を考える
 - 5-3-1 「質」と「形式」の関係
 - 5-3-2 「質」と「内容」の関係
 - 6 卒論・修論の書き方
 - 6-1 卒論・修論の合格基準
 - 6-2 卒論・修論の「量」について
 - 6-3 卒論・修論の「質」について
 - 7 おわりに
- 参考文献

1 はじめに

私の授業やセミナーでは期末の最終レポートだけでなく講義の中でも多くの中間レポートを学生に要求してきました。そのなかで少なからぬ学生から「どんなレポートを、どのように書けばよいのか」との質問が出て来ています。そこで以下では、これまでに提出されたレポートや卒論・修論で私が気づいた点について解説し、今後の参考に供したいと思います。学生のレポート・論文作成だけでなく、その指導に悩んでいる教師にとってもお役に立てれば幸いです。

2 なぜワープロで書くか

私の講義では課題図書を指定して、それを何回かに分けて報告させることが少なくありません。これまでの「授業開き」で配った「授業計画」でも、その点についてふれていますので、それをまず以下に再録しておきます。

書式設定をA4サイズで40字×40行とする。中間レポートは必読課題図書を読んで、各章ごとに、印象に残ったところを「引用」し、その「理由」を書き、最後に最低ひとつの「疑問」を付け加える。段落の最初に必ず「引用」「理由」「疑問」などの小見出しを付け、「引用」「理由」「疑問」の区別が分かるように書き分ける。

上記では冒頭に「A4サイズで40字×40行とする」と書式設定を指示してありますが、これはワープロでのレポート提出を前提としているからです。高校まではレポートをワープロで書かせることはほとんどないとおもいますが、大学では逆にそれが普通になります。少なくとも私の授業ではワープロで書いた文書提出を原則とします。

なぜワープロ文書の提出を原則とするのでしょうか。それは第1に、書き慣れると、その方が手書きよりもはるかに文書作成が容易になるからです。

というのはワープロ文書は書いたあとの修正、すなわち「訂正」「削除」「入れ替え」などが自由に行えるからです。これが原稿用紙への手書きだと、少々の「訂正」は消しゴムや修正液で可能だとしても、長文の訂正はほとんど不可能ですから、全て書き直さなければなりません。

また手書きの場合、書いた文書の「訂正」「削除」「入れ替え」は鋏と糊でおこなう以外にあり得ません。私自身は、昔、雑誌原稿を頼まれたとき、鋏と糊で「訂正」「削除」「入れ替え」をおこない、それを繋ぎ合わせたものをコピーで取って出版社に送るという作業を繰り返してきました。しかし、役所への正式文書をこのような方法でおこなっても誰も受理してくれないでしょう。

ですから、最初は少し面倒でもワープロで文書作成することに慣れておいた方が、あとになって楽ができるのです。まさに「苦あれば楽あり」です。また、このような作業に慣れていないと、卒業論文や修士論文の作成は気が遠くなるような作業になります。私自身は卒論を手書きで書きましたが、今から考えると「よくぞやった!」という気がします。また修論(英文)はタイプライターで書きましたが、一字でも間違えると全て書き直しですから、泣くような思いでした。

ですから今の学生は、ワープロがあるおかげで上記のような苦勞をしなくても済むのですから、本当に幸せだと思います。あとに来る便利さを考えれば、ワープロ操作に慣れるまでの苦勞など問題ではありません。しかもパソコンの進歩とワープロソフトの進化によって、パソコンが導入された最初の頃の苦勞とは比較にならないくらいの容易さで、ワープロ文書を作れるようになっていきますから、これが使いこなせないということは一種の「非識字者」です。就職しても使い物にならず、すぐ首になるでしょう。

なお上記で書式設定を「A4サイズ」としたのは、昔の日本人はB5サイズやB4サイズの文書しか使いませんでした。最近の公式文書はA4サイズが普通になっているからです。

また「40字×40行」としたのは、昔の原稿用紙が400字(20字×20行)が標準だったからです。したがってA4(40字×40行=1600字)1枚ということは原稿用紙4枚分(400字×4=1600字枚)にあたります。今でも出版社からの原稿依頼で「400字詰め原稿用紙〇〇枚程度」という言い方が残っているのは、このためです。

ただし、自分の好みに「50字×50行」にしても良いし、それを読みやすくするために「2段組」に編集すること、あるいは表や写真・図表などを挿入することも、ワープロなら自由自在です。

このような便利さがワープロで文書を作成することの強みです。少しずつで結構ですから、ぜひワープロで文書を作成する技術を磨いて欲しいと思います。

とは言っても、レポートや卒論・修論は「内容」が幹であり、「形式」は枝葉です。したがって以下の説明は主として「形式」に焦点を当てますが、同時に「内容」にも留意したいと思います。

3 中間レポートをどう書くか

3-1 課題図書と中間レポート

3-1-1 まず「引用」と「説明」を書き分ける

先に述べたように、私の講義では課題図書を指定して、それを何回かに分けて報告させることが少なくありません。「授業開き」で配った「授業計画」の「手引き」でも、その点についてふれていますので、もう一度それを再録しておきます。

書式設定をA4サイズで40字×40行とする。中間レポートは必読課題図書を読んで、各章ごとに、印象に残ったところを「引用」し、その「理由」を書き、最後に最低ひとつの「疑問」を付け加える。

段落の最初に必ず「引用」「理由」「疑問」などの小見出しを付け、「引用」「理由」「疑問」の区別が分かるように書き分ける。

各章で印象に残った箇所を5-10行で抜き出し、その理由を20行以上30行以内で書く。さらに読んで浮かんだ疑問を最低1個を付け加える。

将来、卒論や修論を書くときは、印象に残ったところを「引用」するだけでなく、読んだ文献（論文や書籍）について「要約」しつつ論評していく力が求められるのですが、最初からそのような課題を与えると、書くことが苦痛になります。それで、「印象に残ったところを引用する」という課題にしました。これだと、「印象に残ったところ」をどこか1カ所だけ抜き出して、その「理由」を説明するだけで済むので、精神的負担が小さいと考えたからです。

ところで引用を「5-10行」とした理由ですが、レポートだけでなく、修論・卒論でも、他人の文章をそのままコピーしてあたかも自分の意見・考えであるかのように装っているものが少なくありません。したがって引用の量を限定し、しかも「引用」と「理由」（＝「自分の考え・意見」）をきちんと書き分ける作法を身につけることがどうしても不可欠になります。

しかも「引用」と「理由」「意見」を書き分けるという観点から見ると、「40行」というスペースの半分以上が引用で埋まっているというのは好ましいことではありません。そこでおおよその目処として「5-10行」の引用としたわけです。

また引用の作法として、引用したページを明記することも欠かせない作業です。さもないと文献のどこを引用したのかが不明になるからです。引用行数が「5-10行」程度であれば、次のページにまたがることは稀なので、「p.13, ll.3-12」という表記になります。この場合、引用箇所は「13頁の3行目から12行目まで」という意味になります。

なお引用する場合、引用箇所が複数ページにわたる場合、「pp.21-34」というふうに表記するのが習わしです。ただし卒論や修論の場合、複数ページわたる引用箇所が多くなるので、いちいち引用行数（ll. 3-12など）を明記しません。

3-1-2 なぜ「最低一つの疑問」を付けるのか

教師から教えられた知識を丸暗記して試験で吐き出すのが従来の勉強でした。しかし、丸暗記を強いられる勉強は面白くありませんし、技術が日進月歩で変化し、情報が氾濫する現在では、丸暗記の知識は余り役に立ちません。

まして世界最強の大国が嘘をつきながら戦争を始める時代にあっては、与えられた知識・情報を鵜

呑みするのではなく「立ち止まって考える力」が不可欠です。最近 (2000, 2003), OECDの学力調査でフィンランドが学力世界一として有名になりましたが、ここで試されたのも、世界中の叡智を集めて研究された新しい試験問題であって、丸暗記の知識を試すものではありませんでした。

課題図書を読んで中間レポートを書く場合も、「立ち止まって熟考する力」をつけるための基礎訓練として、「最低一つの疑問をつける」ことをレポートの条件に付け加えたのは、このような事情を考慮に入れたからです。

もちろん「何故そのような疑問を持ったのか」という理由を詳しく説明してあれば、更に優れたレポートになります。なぜなら、疑問の理由を説明できることそのものが高度な学力を持っている証拠であり、そのような力なしに将来の卒論・修論はあり得ないからです。

また優れた研究というものは「優れた疑問」からしか生まれません。また、このような疑問を持つことの面白さ、それを友だちと議論しながら解決していくことの面白さを自らが体験していなければ、教師になったときに、それを生徒に教えることもできないでしょう。

実を言うと、「最も優れた疑問」を見つけるというのは、「解決可能で最も困難な疑問」を見つけるということなのです。ノーベル賞受賞者というのは、実はこのような疑問をつくり出した人なのです。

以上いろいろ述べてきましたが、中間レポートで「最低一つの疑問をつける」という条件を付けた裏には、私のこのような思いが込められていることだけは理解して欲しいと思います。

なお以上の点に関しては、論文「英語教師の三つの仕事、三つの危険」で更に詳しく拙論が展開されています。これは岐阜大学教育学部研究報告として私のホームページで公開されています。しかし、これは拙著『英語教育原論』(明石書店, 2007)にも再録されていますので、そちらの方が参照しやすいかも知れません。

3-1-3 なぜ「小見出し」をつけるか

前項で、中間レポートは課題図書を読んで各章ごとに印象に残ったところを「引用」しその「理由」を書くこと、そして「最低一つの疑問」を付け加えることを条件とする理由を述べてきたつもりです。しかし先に紹介したレポートの「手引き」には最後に次のような条件が付け加えられています。

各章で印象に残った箇所を5-10行で抜き出し、その理由を20行以上30行以内で書く。さらに読んで浮かんだ疑問を最低一つを付け加える。

段落の最初に必ず「引用」「理由」「疑問」などの小見出しを付け、「引用」「理由」「疑問」の区別が分かるように書き分ける。

つまり、このレポートの場合、「引用」「理由」「疑問」などの「小見出し」が必ず必要だということになります。今まで提出されたレポートを見ても、このような小見出しがないので、どこまでが「引用」で、どこからが「理由」なのかが分からないものが少なくありませんでした。また「疑問」が全く書かれていないものもあります。

卒論や修論の場合、引用だけで一つの節ということはありません。引用は本文の中に組み込まれてしまいます。ですから、引用だけで一つの小見出しを成すことは普通は考えられないのですが、今は「引用」と「理由」「疑問」を書き分けるための基礎訓練として、このような書き方をすると理解してください。

また上記では、「引用した理由を20行以上30行以内で書く」というように、理由を説明する分量を「20-30行」としましたが、これは学生の負担を考えたからです。

つまり、中間レポートの分量がなるべくA4サイズ1枚で収まるように考えたのであって、徐々にレポートを書き慣れてきたら「理由」や「疑問」を書く分量を制限しないほうが良いと考えています。というよりも、「書く力」を鍛えるためには、本当は「量」をたくさん書いた方がよいのです。

しかし学生数が多い場合は、読む方の負担もありますから、読む方(教師)と書く方(学生)の双方の負担を考えて、「A4サイズ1枚」から出発することにしているわけです。さもないと書くことの面白さを体得する前に、書くことへの恐怖感や苦痛ばかりを増大させる恐れがあります。

こうして少しずつ書き慣れてきたら、次に「量」を書いてみるのが大切です。ただし他人の文章を書き写して量を増やしても全く書く力の訓練には役立ちません。増やすべきなのは「疑問」「理由」「説明」など、あくまで自分の書いた文章です。とりわけ重要なのは、既に述べたように、「価値ある疑問」をつくり出すこと、「何故そのことに疑問を持ったのか」を豊かに説明できる力です。

また「量」が書けるようになったら、小見出しの付け方も「引用」「理由」「疑問」のような素っ気ないものではなく、それを見れば書いてある内容が透けて見えるような「洒落た小見出し」をつけることができる力を鍛えることも大切です。しかし、この点については拙著『英語にとって評価とは何か』第3部「実践研究報告と授業評価」で詳しく書きましたので、それを参照してください。

3-2 映像資料と中間レポート

3-2-1 「引用」「要約」から「疑問」への飛躍

先にも述べたように、学生は「疑問をつくり出すこと」に慣れていませんから、最初のうちは文献資料（課題図書）を読んで「印象に残ったところ」を「引用」することから書く練習を始めることにしています。最初から「要約」を要求すると、書くことが苦痛になるからです。

ですから分量も少なくして「A4版1枚」を当面の目標にします。といっても、これは原稿用紙の4枚分に当たるわけですから、書くことになれていない学生は、たった「A4版1枚」でも、最初は難しい課題と映るようです。しかし、学期の終わり頃には、「A4版3枚」でも易しい課題だと思えるようになるから不思議です。

それはともかく、少しずつ書くことに慣れてきたら映像資料の「印象に残った場面」を書き出して、その理由を書く課題も出します。映像資料は、見た映像の「要約」をすることが最初の仕事になるのですが、これは「引用」と違って難度がぐっと高くなります。

そこで映像の「引用」、すなわち「印象に残った場面」を書き出して、その理由を「説明」する課題を先ずやってもらいます。

書籍の場合、最初から文字化されていますから、その「印象に残っている箇所」を書き写すだけの作業、すなわち「引用」は誰にでもできる作業と言えます。しかし映像を見て印象に残った場面を「要約」する作業は、そんなに簡単な作業ではありません。

というのは、「映像の引用」は「印象に残った場面」を自分のことばで「まとめ」なければならないからです。だから、書き慣れていない学生にはこれだけでも大変な作業です。まして、映像全体の内容を「要約」する作業は、大変な難事業です。文字化する以前に映像資料の全体像を頭の中でまとめなければならないからです。

要するに、「映像の引用」は「印象に残った場面」を自分のことばで「まとめる」わけですから、小さな「要約」作業とも言えるわけです。こうして「小さな要約」に慣れてきたら、「映像全体の要約」＝「大きな要約」に移ってもらうわけです。

ところで、ここで大切なのは、(1) 映像資料を見て、いくつの疑問をつくり出すことができるか、(2) その疑問を解決するのに、どのような資料・文献をいくつ見つけ出すことができるか、です。

というのは、前節で述べたように、「優れた疑問」をいくつ創り出し、それを「どう解明するか」が最も重要になってくるからです。これは、文章でそれを「どうまとめるか」「どう発表するか」よりも困難な課題と言えるかも知れません。

しかし、実は「優れた疑問」というのは、浮かんできた疑問を調べてまとめているうちに次の新しい疑問として浮かんでくるのが少なくないのです。つまり「優れた疑問」をいくつか創り出し調べたあとで、それを文章にまとめるのではなく、疑問を文章化したり調べたことを報告や発表のために文書化しているうちに、次の新しい疑問が浮かんでくるのが少なくないのです。

私自身の体験からすると、「頭で考える」のではなく、「手で考える」ことの方が遙かに多いように思います。考えてみれば、人間がサルからヒトに進化するに当たって、「直立歩行」ができるようになり、4つ足歩行では使えなかった手が自由に使えるようになったことが大きかったと言われていま

す。自由になった手がなければ道具の発明もあり得なかったからです。「自由な手」が脳の発達を促したのです。

課題図書を読んで一番印象に残っているところを引用する作業は、日本語を読む力のある学生なら誰にでもできます。問題は、引用の理由を説明したり価値ある疑問をつくり出したりする力です。その箇所がなぜ印象に残っているのかを読み手に分かるように説明するためには、文章力が必要ですし、疑問をつくり出す力は更に高度な能力です。

上記では「疑問」を創り出すことのみを強調していますが、ゆとりがあれば、何故そのような疑問が浮かんだのかの説明を付け加えてください。そうすれば、自分の疑問が「価値ある疑問」なのか自然とみえてくる場合が少なくないからです。また、これが卒論や修論の「研究の動機」を書く訓練につながっていきます。

3-2-2 「要約」で欠かしてはならないこと

今までは映像の「要約」よりも文献の「引用」が何故やさしいかを述べてきましたが、以下では映像の要約で「最低、何が書き込まれていなければならないのか」を説明します。

まず映像を見て記録しておかなければならないのは、「題名」「制作者」「制作年度」「放映時間（～分）」「放映局・放映日時」などです。

ここで、「放映時間（～分）」「放映局・放映日時」は別にしても、「題名」「制作者」（できれば「制作年度」）は欠かしてはならないものです。本を読んだ場合の記録として「書名」「著者」「出版社」「出版年」を書いておくことが欠かせないのと同じです。ところがレポートの中には「題名」すら書いてないものがあって驚いてしまいます。

ドキュメンタリーの場合、それが「いつ」「どこで」制作されたものかも重要な情報です。ベネズエラの現状をフランスの放送局が作ったのかアメリカが作ったのかによって情報の信頼度はかなり違ってくることが考えられますし、その制作年度を見れば情報の新しさを判断する材料を得ることができるからです。

私が映像資料を提供する場合はドキュメンタリーが多いので、そこに絞って「要約」の仕方を述べるとすれば、次のようになります。

まず映像の「主題」「概要」は何かということです。どんな事件の何を問題にしているのか、ということです。

もちろん「題名」（「副題」も含めて）が「主題」「概要」を示していることが少なくないのですが、そうでない場合もありますから、これは重要なことです。

また「題名」「副題」が「主題」「概要」を示しているからといって、その具体的な事実が読み手には伝わりませんから、事件の「概要」「あらすじ」を書いておくことは不可欠です。

ではどうすれば簡単に「概要」「あらすじ」を書けるようになるのでしょうか。そのためには小説を読むときと同じように、次の三つの観点、すなわち「時」「場」「人物」に着眼すると便利です。

まず「時」ですが、「事件のおきた時または年」です。映像の制作年が書いてあるからといって、それが事件の起きた年と同じであるとは限りません。また、その事件がいつから始まり、いつ終了したのか、まだ持続しているのかも重要です。

また「事件の起きた場所」「事件の主要な登場人物」を抜きに事件の「概要」「あらすじ」を説明することはできないはずです。ですから「時」「場」「人物」をまず記録しましょう。

そのうえで重要なのは「事件設定」、すなわち「何故そのような事件が起きたのか」という「事件の背景」「事件の発端」の記録です。これらなしには次に述べるべき「事件の経過」を説明できないからです。

すなわち、レポートの最初を書くべきなのは「時」「場」「人物」「事件設定」の四つということになります。あるいは「要約」の最低必要条件というわけです。

これらを述べた上で、事件の「概要」「あらすじ」を説明していくことになるわけですが、事件が

展開していくにつれて「場」「人物」も変化したり増えたりしますから、冒頭で全てを述べる必要はないとも言えます。しかし映像を全て見終わってからレポートを書くわけですから、できれば冒頭で「概要」を紹介してから、事件の「経過」「あらすじ」を説明してもらった方が読者には便利です。

逆に言えば、これらの要素がきちんと書き込まれているレポートが優れたレポートだということになります。そして最後に「考察」が来ることになります。つまり映像を見て「思ったこと」「新しく発見したこと」「浮かんできた疑問」などを書くわけです。

そして、この「優れた疑問」が次の調査・研究の土台になることは既に述べたとおりです。なぜなら「疑問」なしには次の課題・研究対象は浮かんできませんし、教師が次に読むべき本・推薦すべき本を紹介・提示したくても、しょうがないからです。

もう一度まとめておくと、映像資料のレポートは、大きくいえば次の三項目から成っていることになります。

- (1) 「題名」「制作者」「制作年度」「放映局・放映日時」「放映時間（～分）」
- (2) 「時」「場」「人物」「事件設定」「事件の経過」「事件の主題・概要」
- (3) 「思ったこと」「発見したこと」「浮かんできた疑問」

しかし、よく考えてみると「主題」＝「この映像は何を訴えたものか」は全てを書き終えたあとでないと、なかなかまとめづらいものですし、「考察」と切り離し難いものです。

また「時」「場」「人物」も広い意味で言えば「事件設定」に当たるとも考えられるので、大西忠治『文学作品の読み方指導』（明治図書、1988）の用語とは少し違ってきますが、ここでは、「事件設定」＝「時」「場」「人物」「事件の背景・発端」としておきます。

すると、映像資料のレポートは、もう一度まとめなおすと次の三項目から成っていることになります。つまり、このような項目がきちんと書き込まれているものが「優れたレポート」ということになるわけです。

- (1) 映像データ：「題名」「制作者」「制作年度」「放映局・放映日時」「放映時間（～分）」
- (2) 事件設定：「時」「場」「人物」「事件の背景」「事件の経過・概要」
- (3) 考察：「事件の主題」「思ったこと・発見したこと」「浮かんできた疑問」

もちろん、「卒論」や「修論」では、この最後の「考察」こそが最も重要な評価の対象になります。なぜなら、この「考察」（特に「疑問」）なしには研究テーマが出て来ませんから、思考はそこで停止し、論文に深まりや広まりが全く期待できないことになるからです。

そして、「次は何を調査・研究したらよいのでしょうか」などと、いつも指導教官の助言をあおがなければいけないことになり、いつまでたっても自立した研究ができないことになります。

また、このような状態では、教えられたことを暗記するだけの学習形態から脱却できませんから、将来、教師になったときも「自ら疑問をつくり出し自ら調べ解決していく面白さ」を生徒に教えることはできません。

3-2-3 インターネットで検索する際の留意事項

先にも述べたかと思いますが、教えられた知識を丸暗記して試験のときに吐き出すだけの勉強では、現在のように世界の情勢がめまぐるしく変化し、また学問研究の進展が著しい時代においては、憶えた知識もすぐ古くなって役立ちません。

また今度のイラク戦争で典型的に見られたように、技術が高度化し情報が氾濫している現在では、大手の新聞やテレビを使って「大量破壊兵器がある」と嘘をついて戦争を始めても、庶民はなかなかそれを見抜けません。ですから与えられた知識を立ち止まって吟味する力が必要です。

そこで私の授業では「疑問をつくり出す力」を重視してきたことは既に述べたとおりです。特に「異文化理解」の場合は特にそうです。「授業開き」で配った「手引き」「授業計画」を見てもらえば、その理由がよく分かってもらえると思います。それには次のように書かれていました。

この授業では「知識」を詰め込むことではなく「考える力」「疑問を作り出す力」を育てる

ことを目標とする。具体的には次の4点を当面の学習目標とする。

- (1) 映像資料を見て、幾つの疑問をつくりだすことができるか
- (2) その疑問を解決するのに、どのような資料・文献を幾つ見つけ出すことができるか
- (3) 個人で見つけ出した資料・文献をどのようにまとめるか、それをどのように発表するか
- (4) 発表にあたってグループでどのような相談・準備をし、その中で、どのような発見が得られたか

私の授業では毎週または隔週に何かの疑問を創り出し、それを文書化して提出したり発表するわけですから、ともすると、インターネットで疑問の解答を見つけてレポートを書くという学生がどうしても多くなります。

その際に、注意すべきことは、Googleなどの検索エンジンで出て来た最初の項目を、疑問に対する答えとして満足してはならないということです。これは、英文を読んでいて分からない単語に出くわしたとき、辞書の一番の意味で英文を理解しようとするのと同じことだからです。

検索の結果、最初に出て来た項目が疑問に答えてくれる情報に見えたとしても、それが正しい情報だとは限りません。チョムスキー『メディア・コントロール』(集英社新書, 2003) が述べているように、意図的に間違った情報が載せられている場合もあるからです。

ですから検索で出て来た項目の最低3つは読んでみる必要があります。そして報告または発表する場合は、「件名」「URL」(できれば検索した「年月日」も)を必ず明記しておいてください。レポートで引用する場合は、出典として引用の末尾に置くのがよいでしょう。

(インターネット情報は時間が経つと消えてしまうものも少なくありません。ですから引用の末尾に「URL」だけでなく「070123」などと書いておくと、これは「2007年1月23日」の記事だということが分かります。)

また提出されたレポートにはしばしばURLアドレスの半角文字しか貼り付けられていない場合がありますが、これではそれを読んだ人がその情報をもっと詳しく知りたいと思っても、あるいは検証したいと思っても、それにアクセスすることは困難です。しかしその情報の「件名」「タイトル」が書いてあれば、それを検索語として入力すれば、簡単に同じ情報にたどりつきます。

自然科学の論文の場合、「追試可能性」「検証可能性」ということが極めて重要な要素になります。「本当にその論文に書かれているとおりののか」を実験してみることに、すなわち「追試」できるように書かれているかが重要なのです。それと同じように、「引用」または「要約」されていることが、本当に該当サイトの該当箇所が存在しているかを検証できるようにしておくことが、書き手の守るべき作法なのです。これはインターネット情報だけではなく、書籍からの引用や要約についても同じです。

上ではインターネットで検索する場合、最低「3つ」の情報源にあたることを勧めましたが、もう一つ重要なことは、著者不明の匿名記事や自分の情報源を明らかにしていない記事は信用しないということです。

よく利用されるインターネット百科事典は、末尾に参考資料が明示されていますから、他の記事と比べると信用度が遙かに高いと言えます。しかし、「著者」がはっきりと分かっている「参考文献」も巻末に提示されている「書籍」と比べると、『Wikipedia』は信用度がかなり劣ります。『Wikipedia』が正式な論文で引用されることが少ない理由がここにあります。

4 最終レポートの書き方

4-1 「異文化理解講読」の場合

授業開きのときに配った「手引き」「授業計画」では最終レポートについて次のような指示が書かれています。先ずそれを下記に引用してから若干の説明を加えたいと思います。

最終レポートは「選択課題図書3冊以上」を読み、「概要(要約)」「考察(意見・疑問)」を書く。

余裕があれば、浮かんだ「疑問」を元に自分なりのテーマを決めて、研究した結果を報告としてまとめる。3冊の内容はその報告の中に含めて叙述する。

最終レポートには「まえがき」「あとがき」をつける。各節に「小見出し」を付ける。授業で学んだこと発見したこと疑問に思ったことを「あとがき」または「まえがき」に必ず含める。

最終レポートの分量は最低100行（A4版で約2枚半）以上。冒頭に英語要約（5行以上）を付けてあるものにはボーナス点を加算する。

最終レポートはプリントアウトしたものを提出する。フロッピーまたはCD-Rを付けて提出したものにはボーナス点を加算する。

あるいは「添付ファイル」としてメールで寺島あてに送信しても良い。ただし保存するときの題名は必ず自分の氏名とする。

上記では「選択課題図書3冊以上」とあります。何度も述べているように、インターネットで情報を検索して報告を書く場合でも、最低3つの情報源に当たることの重要性を前節で述べましたが、これは文献情報の場合も同じです。

インターネットの場合は、どんなに大きな情報であっても、書籍にすれば、その中の1章程度の分量しかありません。したがって、インターネットを使って情報を集め、中間レポートを書くことに慣れてきたとしても、3冊の書籍を読んで自分の思考を最終レポートにまとめることは、並大抵のことではありません。

しかし繰り返しになりますが、書籍を早く正確に読み取って「価値ある疑問」を創り出す力なしでは、情報が氾濫している現代を生き抜いていくことはできません。テレビの宣伝を鵜呑みにして間違った商品を買うと命取りになったり、米国市民のように間違った情報を信じて間違った戦争に賛成し他国の市民65万5千人（2007年10月現在）を死に追いやることにもなりかねないからです。

したがって単に情報の正確さだけでなく、氾濫する情報の量とその変化の早さを考えると、3冊ぐらいいは短期間に読める力をつけておくことは今やどうしても不可欠なのです。ただし、その3冊は指定文献から選ぶ必要はなく、授業を受けているうちに読みたくなった本（あるいは関連する本で日頃から読みたいと思っていた本）が自分にあれば、それでも構わないのです。

では、その3冊の本を最終レポートでどのようにまとめたら良いのでしょうか。上記の「手引き」では「“まえがき” “あとがき” をつける」「各節に“小見出し”を付ける」「授業で学んだこと発見したこと疑問に思ったことを、“あとがき”または“まえがき”に必ず含める」と書いてありますから、全体の構成は例えば次のようになります。

最終レポートのタイトル

氏名・所属講座

0 英語要約

1 まえがき（授業で学んだこと発見したこと疑問に思ったこと）

2 『書名1』（著者，出版社，出版年）を読んで

2-1 何故この本を選んだか

2-2 要約（本の概要）または引用（印象に残った箇所）

2-3 考察（感想・意見・疑問）

3 『書名2』（著者，出版社，出版年）を読んで

3-1 何故この本を選んだか、

3-2 要約（本の概要）または引用（印象に残った箇所）

3-3 考察（感想・意見・疑問）

4 『書名3』（著者，出版社，出版年）を読んで

4-1 何故この本を選んだか

4-2 要約（本の概要）または引用（印象に残った箇所）

4-3 考察（感想・意見・疑問）

5 あとがき

上記では「授業で学んだこと発見したこと疑問に思ったこと」を「まえがき」に入れてありますが、これは「あとがき」に入れても結構です。今後の授業の参考とするために、必ず書いてもらっています。

ここで注意してほしいのは書名を『 』のように二重括弧でくくるのが報告書や論文の作法だということです。また、「最終レポートのタイトル」「氏名・所属講座」を書いた後は、必ず1行の「余白」を入れてください。これは小見出し「1, 2, 3」の後でも同じです。

どう書けば相手に読みやすいものになるか、どんな余白が相手に心の安らぎを与えるかを考えることは、単に形式の問題ではなく人間としての思いやりであり、そのひとの人格を測る一つのモノサシとも言えます。将来、教師になりたいのであれば、これは不可欠の訓練です。読みにくいプリントを配っても生徒は紙飛行機の材料にするだけでしょ。

さらに「冒頭に英語要約（5行以上）を付けてあるものにはボーナス点を加算する」とあります。しかし、これは英語教育講座の科目だから英語力をつける一つの訓練だという意味もありますが、実は将来「卒業研究」や「修士論文」を書いたときの予備訓練という意味も含まれています。正式な論文では、こうするのが作法だからです。

最後に「最終レポートは添付ファイルその他で提出する。ただし保存するときの題名は自分の氏名とする」とした理由ですが、保存の題名を「英語科教育法」などという科目名にすると、私のパソコンに一括保存したとき誰のファイルか分からなくなるからです。

4-2 「異文化理解」の場合

4-2-1 なぜこのような基準をもうけたか

今までの授業では、本を読んだり映像を見たりして、それを「文章化する力」と同時に「価値ある疑問」を創り出す基礎訓練をしてきました。

そこで、この授業では、自分たちで疑問を創り出すだけでなく、それを皆の前で発表する（できれば討論もする）ちからもつきたいと考えていました。つまり教師主導だった授業から学生主導の授業への進化を目指していたわけです。

授業で配布した「授業計画」には次のような「最終レポート」にたいする「手引き」「評価の基準」が書かれていました。今から考えると、まだまだ改善の余地がありそうですが、それを先ず引用した上で少し説明を付け加えたいと思います。

提出レポートの書式は下記の通り。

- 1) A4サイズ, 40字×40行
- 2) 調べたいと思った「疑問」「その理由」をまず書き、それに対して調べたことを書く。
- 3) その際、「引用」「要約」と「自分の意見」を必ず書き分ける。
- 3) 引用出典・要約箇所を必ず明記する。書籍の場合は「著者」「書名」「出版社」「出版年」を必ず書く。
- 5) インターネットが出典の場合は、「件名」「URL」を（できれば「年月日」も）書く。

評価の観点は下記の通り。

- 1) 主として上記の中間レポートおよび最終レポートを元におこなう。
- 2) 自分でもっと詳しく調べてみたくなったことを最終レポートで報告する。
- 3) 最終レポートの分量は上記の書式で100行以上。冒頭に英文で5行以上の要約を付けたものにはボーナス点を加算する。
- 4) インターネットよりも書籍で調べた情報が確かな情報であることが多いので、それを書籍で調べたレポートを高く評価する。
- 5) 小見出しを必ず付ける。「はじめに」「おわりに」のどこかに「授業に対する感想・意見」あるいは「この授業で何を学び何を発見したか」を必ず入れる。

今までに提出された最終レポートを読んで第一に感じたことは、レポートのほとんどが驚くほどの力作揃いだったことです。

これまでの、「異文化講読」の授業で少しは訓練したとはいえ、まだ「自分で疑問を創り出し自分で解決する」ことに慣れていないから、評価も日常評価を重視し、最終レポートの比重を低くしていました。そこで最終レポートの分量も上記の書式で「100行以上」としたのです。しかし驚いたことに、400-500行というレポートも珍しくなかったのです。

もちろん、インターネットからコピーして貼り付ければ分量はどれだけでも増えますから、「量」だけで評価するわけにはいきません。しかし、どのレポートを読んでも、(たとえコピーの貼り付けであったとしても)「量」を稼ぐためにやったというよりも自分で創り出した疑問に答えるために貼り付けたと思えるようなものばかりでした。

ただ今後の卒業研究や修士論文につなげていくためには、「単なるコピーと自分の書いた文章を明確に区別する」という条件は必要不可欠であり、絶対条件です。

既に述べたように、最終レポートでは、「どんな疑問をどのように解決したか」「文献をどのように読み取ったか」が重要です。それは、「引用」「要約」と「考察」「疑問」がきちんと書き分けられているかとも大きく関わってきます。というのは、「考察」から次の新しい疑問が生まれ、それが次の研究・次の文献へとつながっていくからです。

提出されたレポートでも、その点を読んでいて明確に伝わってくるものが少なからずあって、学生の成長ぶりに感心してしまいました。ただ残念なのは、「引用」と「考察」が見事に書き分けられ、思考の流れが読み手にスムーズに伝わって来るにもかかわらず、引用箇所を原書で確かめようとすると、その出典箇所が分からないものがあつたことです。

また将来の卒論・修論のことを考えると、1頁以上にもわたる「引用」はやめること、そのような場合はAPPENDIX (別紙資料)として末尾に添付する方がよいことも、あらかじめ指導しておく必要があると思いました。これはインターネットからの引用についても同じです。自分の考察が、「引用」をつなぎ合わせた隙間にかすかに入り込んでいるだけ、というのは論文ではありません。それは他人の文章のコピーであつて自分の思考ではないからです。

4-2-2 最終レポートの書式モデル

以上のことを考えると、「異文化理解」の場合の最終レポートとして次のようなモデルが考えられます。

最終レポートのタイトル

氏名 所属講座

- 0 英語要約
- 1 まえがき (授業で学んだこと発見したこと疑問に思ったこと)
- 2 『疑問1』
 - 2-1 何故このような疑問が浮かんだか
 - 2-2 文献の要約または引用
 - 2-3 考察 (感想・意見・疑問)
- 3 『疑問2』
 - 3-1 何故このような疑問が浮かんだか
 - 3-2 文献の要約または引用
 - 3-3 考察 (感想・意見・疑問)
- 4 『疑問3』
 - 4-1 何故このような疑問が浮かんだか
 - 4-2 文献の要約または引用
 - 4-3 考察 (感想・意見・疑問)

5 あとがき (残された課題など)
APPENDIX (調べた資料・コピーなど)

このモデルは「異文化理解講読」の最終レポートを少し変形させたものですが、もっと論文らしくするには、疑問三つを冒頭に置き、それを文献を引用しながら順序立てて考察または解決していくという展開の仕方があります。たとえば次のようになります。

最終レポートのタイトル

氏名 (所属講座)

- 0 英語要約
- 1 まえがき (授業で学んだこと発見したこと)
- 2 浮かんだ疑問
 - 2-1 その1 (+何故このような疑問が浮かんだか)
 - 2-2 その2 (+何故このような疑問が浮かんだか)
 - 2-3 その3 (+何故このような疑問が浮かんだか)
- 3 調べたこと
 - 3-1 疑問その1について (文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
 - 3-2 疑問その2について (文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
 - 3-3 疑問その3について (文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
- 4 あとがき (新しく生まれた疑問, 残された課題)
- 5 参考資料一覧 (調べた文献・資料・URL) およびAPPENDIX (コピー全文など)

しかし、これは既に疑問と解答が全て分かった後での書き方です。自然科学の論文では、実験データをもとに、このような書き方をすることは可能かも知れませんが、人文科学や社会科学では、このような書き方はなかなかできません。

英語教育学の論文でも仮説を立て、データを集めて統計処理をしたうえで、上記のようなスタイルで書かれた論文を最近は見かけることが多くなりました。しかし読んでみて何か驚きとか発見がある論文をあまり見たことがありません。

つまり、結論が初めから予想されているようなことを、論文っぽく見せかけるために統計処理をしたとしか思えないようなものが少なくないのです。つまり本当に何かを知りたいからおこなった調査というよりも、何か論文を書かなければいけないからデータを集めた論文なのです。

しかし最終レポートを読んでいると、その疑問を持つに至った過程や理由が素直に書かれていて、納得しながら読み進めることができました。そして書き手自身が「事実は小説よりも奇なり」を研究を通じて実感したこと、その驚きと喜びが読み手にも自然に伝わってくるような素朴な書き方に、私はとても共感を覚えました。

ですから形だけが整った最終レポートよりも、書き手の試行錯誤、つまり「問いが問いを生んでいく」過程が読み手に伝わるようなものが良いと考えます。

私も、今この文章を書いています、書いているうちに新しい着想や疑問が湧いてきて書き終わるまで自分でも全体像が見えません。

ですから、疑問を解いていくうちに次の疑問が生まれてくる「疑問1→疑問2→疑問3」のような書き方を当面はせざるを得ないと思います。その方が、「何故そのことが知りたくなったのか、その理由・動機の説明が乏しく」「得られたデータの分析結果も常識的なレポート」よりも、読み手に納得・感動を与えるのではないのでしょうか。

このようなことを考えると、次のようなモデルも考えられます。というのは一つの疑問を調べているうちに次々と文献を調べたくなり、その結果、新しい発見や考察が生まれることがよくあるからです。というよりも、インターネットで調べるとき「最低三つの情報源にあたる」ことが必要であるのと同じように、書籍の場合も「最低三つの情報源にあたる」ことが求められるからです。

最終レポートのタイトル

氏名(所属講座)

- 0 英語要約
- 1 まえがき(授業で学んだこと発見したこと)
- 2 浮かんだ疑問(+何故このような疑問が浮かんだか)
- 3 調べたこと
- 3-1 文献(その1)について(文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
- 3-2 文献(その2)について(文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
- 3-3 文献(その3)について(文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
- 4 あとがき(新しく生まれた疑問, 残された課題)
- 5 参考資料一覧(調べた文献・資料・URL)およびAPPENDIX(コピー全文など)

4-2-3 冒頭に「英語要約」をつける理由

ここでもう一つだけ書いておきたいことは冒頭の「英語要約」についてです。

英語教育講座の授業だから、最終レポートをすべて英語で書き、その要約を日本語で書く方が本当は望ましいのだと考える学生がいるかも知れません。しかし私は、日本語で自分の考えを論理的かつ豊かに表現する力をつけることが先決だと考えています。そのような訓練なしに書かれた英文は内容的にも形式的にも読むに堪えないのが普通だからです。

一步譲って、文法的間違いのない形式的には整ったレポートであったとしても、それを日本語に直してみたら実に稚拙な論理展開であるものが少なくないのです。

私は英語教育学会の機関誌でそのような論文を多く見てきました。しかも統計的手法を駆使したものですから、表面的には科学的な論文に見えます。しかし先述のとおり、日本語に直してみたら、その論文の仮説と結論は実に平凡なものであることが多いのです。

何度も言いますが、そのような英語論文(あるいは英語レポート)であるよりは、書き手の思考過程が読み手に伝わるような日本語論文の方が私は良いと考えています。

ですから、あとで飛躍的な成長を遂げるためには、「日本語で論理的かつ豊かに自己表現が出来るようになるまでは、論文を全て英語で書くのは控えた方が良い」というのが当面の私の考えです。冒頭の「英語要約」は、そのための予備訓練です。

4-3 「英語科教育法」の場合

4-3-1 英音法の基礎を身につける

私が担当する「英語科教育法」では、教科書を利用しながら「英音法」の基礎を教え、それを実際の授業でどう生かすかの演習を兼ねて、学生に実際に歌ったり音読してもらったりしてきました。

そこで先ず上記の教科書で理論学習をしてもらおうわけですが、そのために3回に分けてレポート提出をしてもらっています。

この中間レポートの出し方は「3-1, 課題図書を読んだあとの中間レポート」の項で既に説明してあるので、ここではこれ以上、詳しい説明を省きます。

ただここで確認しておきたいことは、この「英語科教育法」の中間レポートでも「疑問を創り出すこと」を大切にしていることです。

ともすると英語の音声訓練は、一方的な講義で理論を教え込まれたり、それとは全く逆に、ひたすら正しい発音をするための訓練であったり(あるいは、聞き取り能力をつけるための繰り返しドリルだったり)することが多いのですが、私の講義では「英語が聞き取れなかったり、英語らしい発音にならないのは何故か、を考えること」を大切にしてきました。

ですから上記教科書を読んでもらう場合も、教科書の叙述を鵜呑みするのではなく、「読んで発見したこと」を「引用」しつつ、同時に「読んで新しく生まれた疑問」を書いてあるレポートを高く評

働いてきました。

こうして講義の前半は、出されてきた疑問に答えるというかたちで進行してきました。学生も一方的に「聞きたくないこと」を聞かされるのではなく、「聞きたいこと」に答えてもらうという形で進行していきますので、(手前みそになりますが)今のところは好評です。

後半は実際の演習が中心になりますから中間レポートらしきものはあまりありません。後半で中間レポートがあるとすれば、「表現よみ」に挑戦してもらうための演説に自分でリズム記号をつけて提出すること(演説の内容を確認するために和訳も付ける)ことぐらいでしょう。

「リズムよみ」はこのリズム記号を付けたプリントをグループで相互に検討し合って合意に達したものでおこないます。ですから、この中間レポートなしでは一步も進みません。また演説の内容が理解されていなければ当然ながら「表現よみ」もできません。

4-3-2 何を「最終レポート」で書くか

さて、「表現よみ」を終えた後の最終レポートでは何を書いてもらうか、それが次の問題になってきます。

しかし、この講義では「英音法の幹とは何か」を理論的のみならず実践的にも納得してもらうことにあるのですから、その成果が果たして有ったのか無かったのかが焦点になります。そこで最終レポートでは、最低、次の5点を書いてもらうことになります。

- ① この講義で学んだこと発見したこと(理論学習で学んだこと発見したことは何か、それ実際に演習で試してみてどのような発見があったか)。
- ② この講義は「講義の進め方」「授業の組み立て方」そのものが実際に教師になったときに役立つように工夫しているつもりだが、その観点から見て「この講義で学んだこと発見したこと」は何か。
- ③ この講義を終えるに当たって「新しく浮かんだ疑問」はないか。もしあればそれを記せ。またその疑問について自分で調べてみたこと新しく発見したことがあれば、それを記す。
- ④ 最後に自分の最終レポートについて5-10行程度の英語による要約を付ける。ただし、これは最終レポートの冒頭に付ける。
- ⑤ 全体の構成が見やすく且つ読みやすくなるように必ず「小見出し」を付ける。その際、冒頭および末尾に「はじめに」「おわりに」を入れる。

以上のことを図式化すると次のようなモデルになります。

最終レポートのタイトル

氏名(所属講座)

- 0 英語要約
- 1 はじめに(授業で学んだこと発見したこと)
- 2 浮かんだ疑問(+何故このような疑問が浮かんだか)
- 3 調べたこと(文献の引用・要約および感想・意見・発見など)
- 4 おわりに(新しく生まれた疑問、残された課題)
- 5 参考資料一覧(調べた文献・資料・URL)およびAPPENDIX(コピー全文など)

ここで、上記の①—⑤について若干の説明をしておきます。まず③についてですが、たとえば「最後に挑戦した演説の内容について新しく調べてみたこと」を書くのも良いのです。

というのは、演習で使った“Democracy Now”の演説内容について実際に調べてきた学生がいたからです。これは異文化理解の講義で身につけた「疑問を創り出す力」が生きて働いている証拠です。

この演説は、ハワード・ジンの名著『民衆のアメリカ史』(明石書店、2005)の資料集『Voices of a People's History of the United States』から11人の民衆の声を選び出し、名優が本人になりきって「表現よみ」(Dramatic Reading)したものです。

したがって、人物や事件の背景を十分に知らずに演説だけを「美しい発音」でいくら英語っぽく音

読しても、それは「表現よみ」からは程遠く、あのグランドゼロ近くの教会に充ち満ちていた怒りが聞き手には決して伝わらないからです。

ところが、ともすると英語科の学生による「表現よみ」は、ただ単に正しいリズムで読むということにこだわったものが多く、最終レポートも自分で新しく何か疑問を創り出し、それを調べて付け加えるという学生があまり見られませんでした。

ところが、副専で英語教師の免状を取ろうと受講してきた学生の最終レポートには、上記のような背景についても調べてきた学生が少なくなく、結果として「表現よみ」もその人物になりきった、力強さに満ちたものが多かったのです。

有名なシェークスピア学者であった中野好夫氏は東大英文科の学生に「英語馬鹿になるな」と説教したことで知られていますが、この教訓は今でも生きて伝えられねばならないと思わせる結末でした。英語教育講座の学生は特に上記の点に留意して欲しいと思います。

これは②についても言えます。他の講座からの学生による最終レポートには「この授業の進め方そのものが非常に面白く、英語教師でなくても、教壇に立ったときにぜひ試してみたい。そんな工夫とアイデアに満ちた授業だった」と書いてあるものが多かったのですが、英語教育講座の学生の最終レポートは「英音法」についてのみの記述が多く、授業展開について書いている学生は皆無に近いのです。いくら英語ができる教師でも授業が巧くいくとは限らない、その一つの原因がここにあるように思います。

最後に、④の「英語による要約」についてです。これは英語力をつける訓練であると同時に全体を要約する力を付ける訓練でもあるのですが、既に前節で述べたように、一番大切なのは、本文であって「英語要約」ではありません。これは将来、英語で論文を書くときの「準備運動」程度に考えてください。

4-3-3 英文法の基礎を身につける

私の講義では、英語科教育法Ⅰで「英音法の基礎力を身につけ」、英語科教育法Ⅲで「英文法の基礎力を身につける」ことを中心に授業や演習を展開してきました。そして「英語科教育法Ⅰ」と同じように「英語科教育法Ⅲ」でも、「疑問を創り出し」ながら「英文法の基礎力を身につける」ことを強く学生に求めてきました。

というのは、学生の多くは英文法を「暗記の対象」としてしか考えていないからです。したがって彼らは「ことばの不思議さ」「ことばを学ぶことの面白さ」を知りません。これは最近の英会話ブームのあおりを受けて中学時代には英文法を学ぶ機会がほとんど与えられず、また高校時代には受験対策の一環としてしか英文法を学ぶ機会を与えられてこなかったことの、当然の結果と言えるかも知れません。

このような学生が英語教育講座にも多いことを考えると、今までとは違った講義を組み立てる必要があるのではないかと思いはじめました。さもないと、彼らが将来、教師として教壇に立ったとき、同じ悪循環を繰り返す恐れがあるからです。そこで「疑問を創り出し」ながら「英文法の基礎力を身につける」ことを講義の大きな柱にしようと考えたのです。

この英語科教育法Ⅲの中間レポートが「異文化理解講読」と同じスタイルにならざるを得ないのは、このような理由によります。

しかし他方で、「異文化理解講義」では、「異文化理解講読」の時とは違って、「自ら疑問を創り出す」だけでなく、その疑問を「自ら解決していく」ことを大きな柱としてきました。そして学生たちは課題図書の中間レポートを書くだけでなく、その中間レポートを「グループで出し合い」「グループで発表する」という課題をも見事に乗り切ってくれたのです。

彼らのグループ発表は本当に見事なもので、彼らを国際理解教育学会に連れて行って発表させたいと思ったくらいでした。しかも彼らは英語科教育法Ⅰの授業でも「グループで討論し」「グループでリズムよみ」を発表することにも慣れてきています。個人発表の「表現よみ」(Dramatic Reading)

でも素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた学生が何人もいました。

このような学力を身につけた上での英語科教育法Ⅲの授業ですから、教師から課題図書を与えられて浮かんだ疑問をレポートに書き、それらの疑問に対して私が答えていくというスタイルだけでは物足りなくきているのは当然です。

そこで、この英語科教育法Ⅲの授業も、英語科教育法Ⅰの授業と同じように、課題図書の中間レポートを書くだけでなく、その中間レポートを「グループで出し合い」「グループで発表する」というスタイルにしようと思ったのでした。

彼らのグループ発表も本当に見事なもので、彼らを今度は私の主催する英語教育の研究集会に連れて行って発表させたいと思ったくらいでした。彼らが発表するとき院生（しかも現職の先生）も参加していたのですが、その院生から「あのパワーポイントによる発表原稿ファイルを、USBでもらって行って自分の授業でも使ってみたい」という声すら聞かれたほどでした。

ところで、卒業論文や修士論文では自分で研究テーマ（課題）を決めて、それについて調べていくわけですが、それ以前に今の学生は読書量が圧倒的に少なく、研究する以前に、その前提となる基礎知識が欠けていることが珍しくありません。

そこで既に述べたように、私は各学期毎に、欠けている基礎知識を補い卒論や修論を書くための準備訓練として「選択必読文献」を用意しました。これは教科書（中間レポートのための課題図書）を更に自分でもう一步深めて考察するためのものです。この「選択必読文献」の中から最低3つを選んで最終レポートを書いてもらうことになります。

もちろん、教科書末尾のREFERENCESとして多くの文献が紹介されていますから、それから選んでもらっても良いし、自分で探し出した新しい文献でも構いません。要するに、講義やグループ発表に触発されて「もっと調べてみたい、もっと読んでみたい」と思った文献を、最低3つ選んで、その「要約」「引用」を書き、それについての「考察」を付けて提出するのが最終レポートの課題です。

ただし、この英語科教育法Ⅲの授業は、「疑問を創り出し」ながら「英文法の基礎力を身につける」ことが大きな眼目なのですから、それを念頭に置きながら最終レポートに取り組んでもらうことになります。しかし、その基本的な書き方は、既に「異文化理解講読」「異文化理解講義」「英語科教育法Ⅰ」のところで説明したので、それを必ず参照してください。念のためにモデルを再録するとすれば次のようなものになるでしょう。

最終レポートのタイトル

氏名（所属講座）

- 0 英語要約
- 1 はじめに（授業で学んだこと発見したこと）
- 2 浮かんだ疑問（+何故このような疑問が浮かんだか）
- 3 調べたこと
 - 3-1 文献（その1）について（文献の引用・要約および感想・意見・発見など）
 - 3-2 文献（その2）について（文献の引用・要約および感想・意見・発見など）
 - 3-3 文献（その3）について（文献の引用・要約および感想・意見・発見など）
- 4 おわりに（新しく生まれた疑問、残された課題）
- 5 参考資料一覧（調べた文献・資料・URL）およびAPPENDIX（コピー全文など）

5 評価における「量」と「質」

5-1 英語に「評価」とは何か

最終レポートに関して改めて特筆しておきたいのは、「主として量で評価する」ことについての、一部の学生の反発についてです。私からすると、多くの学生は先ず「量」が書けないのですが、「内容が無くても量さえ書けば、Aの成績がもらえるというのはおかしいのではないか」というわけです。

では、そのように主張する学生の「質」はどうかというと、レポートの形式だけは整っていますが、

書いてある量も少なく、しかも読み手に驚きと発見を与えるような独自性が乏しいものがほとんどなのです。ですから、このような学生には拙論「実践研究論文の書き方」『英語にとって評価とは何か』第3部第5章（あすなろ社／三友社出版、2002）をぜひ読んで欲しいと思いました。

また今までのレポートを読む限り、学生のレポートは「量」が書けないだけでなく、日本語の書き方も、文の主述が不明だったりねじれたりしているものが少なくありません。さらにまた、段落と段落のつながりが非論理的だったり、全体の構成が整っていなかったりしているものも数多く見受けられます。つまり英語以前のところでつまづいているのです。

したがって最終レポートを書く前に、ぜひ次の文献も読んでおいて欲しいと思いました。

拙論「文章の構造における日本語と英語」『英語にとって学力とは何か』第2章第1節（三友社出版、1986）

拙論「母国語の書く力と英語の自己表現」『英語にとって学力とは何か』第1章第2節（三友社出版、1986）

また日本語の「主述のねじれ」や「修飾語句の付け方」など、一文一文の書き方については、せめて本多勝一『日本語の作文技術』（朝日選書、2004）くらいは最低、読んでおいて欲しいと思います。文章全体の考え方については『理科系の作文技術』（中公新書、1981）が役に立つでしょう。

ところで問題は、出された最終レポートをどのように評価するかです。というのは、「評価」の問題を考えていると必然的に「評価とは何か」を考えざるを得ません。

既に拙著『英語にとって評価とは何か』（あすなろ社／三友社出版、2002）でも明らかにしているように、本来、評価とは生徒・学生の能力を序列化するためにはありません。ですから評価の仕方は「A,B,C,D」のような成績評価ではなく「可」「不可」だけで十分だとも言えます。

たとえば実際、大学院修士課程の最終課題である修士論文には「A,B,C,D」のような成績評価はなく、「可」「不可」のみです。しかし、学部の科目については「A,B,C,D」の評価をつけることになっていますので、仕方なく当面のところは次のような評価基準を考えています。

5-2 評価と「量」を考える

私の考える評価を「量」と「質」に分けて書くとすれば次のようになります。

- (1) 最低基準の「量」を書いているならば「C」とする。
- (2) ただし、その「量」が自分の言葉によるものではなく、単にインターネットの内容をコピーして貼り付けたものは「量」とは見なさい。
- (3) 自分の論を支える資料として文献から「引用」「要約」したものは「量」とみなす。ただし必ず出典とその引用ページを明記する。
- (4) その際、1頁すべてが「引用」で埋まるような叙述は避ける（「量」をかせぐための引用と誤解されるから）。
- (5) どうしても大量の資料を「引用」として紹介したい場合は、「APPENDIX」としてレポート末尾に添付する。当然これは評価の対象となる。
- (6) 自分の言葉で最低基準をはるかに超える「量」を書いているならば「B」とする。そのうえで「質」的に優れているものを「A」とする。

5-3 評価と「質」を考える

5-3-1 「質」と「形式」の関係

次に「質」、特に「形式」については次のように考えています。

- (1) たとえ「量」が多くても、レポートとしての「形式」が整っていないものは「A」にすることはできない。特に「異文化理解講読」の最終レポートの項で説明したような形式を守っていないもの

は欠点となる。

(2) たとえば書籍の場合は「著者」「書名」「出版社」をまず冒頭に紹介しておくことは不可欠である。映像資料についても、「出版年」「題名」「制作者」「放送局」「放送年」などを分かる限り記しておく。

(3) また節に「小見出し」が全く付いていないものや、一つの節に全く「段落改行」がないものは極めて読みにくいので評価できない。また段落の冒頭が「1字下げ」になっていないものも欠点と見なす。

(4) 逆に段落改行が多すぎるものも高い評価を与えることはできない。詩(韻文)は一行ごとに改行するが、論説文で改行が多すぎるのは、思考の散乱・論理性の欠如を意味するからである。

(5) 文章中に引用典や引用頁数が明記されていないものも欠点と見なす。レポートの最後に再度、REFERENCE(参考資料:文献やサイトの一覧)を明記することが望ましい。文献一覧の書き方は拙著または拙論の末尾を参照のこと。

5-3-2 「質」と「内容」について

次に「質」、特に「内容」については次のように考えています。

(1) 文献の「概要」を読み手にわかりやすく要約して紹介することは、なかなかの難事である。したがって慣れない人は「引用」だけで済ませても良い。しかし、当然ながら、良い「要約」は高く評価される。

(2) また「考察」では、読み手に理解しやすいように、「引用」「要約」と「意見」「疑問」をわかりやすく書き分ける。これができるようになれば、卒業研究の基礎ができたことになる。

(3) 更に、「疑問」を創り出しただけでなく、その疑問について調査したことを記してあるものは当然ながら高く評価される。なぜなら、これは卒業研究の第1段階に達していると見なされるからである。

(4) 文章では、段落と段落のつなぎ言葉を重視して評価する。論理的に展開されている文章は必ず一つの段落と次の段落の間に論理的なつながりがあり、それを明示するような接続語があるのが普通だからである。

(5) 繰り返しになるが、「はじめに」または「おわりに」で、必ず「本講義で学んだこと・発見したこと・疑問に思ったこと」を書く。

それを書くことが「文献の選択理由」を書くことに自然とつながるし、それは同時に次年度の私の講義を改善するのに役立つからである。

このような作業ができるようになったら、いよいよ卒業研究に着手できることになります。

これまでの最終レポートを読んでいて気づいたことですが、基礎的な文献を読まずに自分の一方的な感想・意見だけを述べるものがありました。しかし、それは書き手にとっても勉強になりませんし、読み手にとっても心地よいものではありません。

最終レポートは、書き手にとっても「驚き」と「発見」に満ちたものであって欲しいし、そのようなレポートは読み手にとっても楽しいものです。私がこのような「手引き」を書かなくてはならないと思うようになったのは、以上のような経過があったからです。

さて、以上のことを踏まえて、いよいよ最後の「卒論・修論の書き方」に移りたいと思います。

6 卒論・修論の書き方

6-1 卒論・修論の合格基準

レポートの書き方についてはこれまでに述べてきたとおりです。既に述べたとおり、これを習得しさえすれば、卒論を書くための準備運動は終わったことになります。しかし本当に問題なのは「何について書くか」です。しかし、その前に卒論の「量」について少し述べておきたいと思います。

かつて私は卒論の合格基準を決めてセミナーの学生に配布したことがありますので、それを先ず再録して、そのあとで「量」についての私の考えを説明します。

寺島研究室「卒論」「修論」の合格基準

1 形式

1-1 A4で40字×40行の設定とする。

1-2 卒論は上記の形式で50枚以上、修論は100枚以上

1-3 ただし英語で書く場合は、卒論25枚、修論50枚以上とする。

1-4 上記には目次、謝辞、序論、結論、資料、参考文献などの枚数も含む。

1-5 日本語で書く場合、必ず英語の要約（卒論の場合は15行以上、修論の場合は30行以上）を付ける。

2 内容

2-1 参考文献は、卒論の場合は10冊以上、修論の場合は20冊以上とする。

2-2 ただし参考文献は必ず自分で読んだもの、本文中に引用してあるものにかぎる。

2-3 章や節の番号や題名の付け方については『英語にとって評価とは何か』第3部を必ず参照する。

2-4 文献の引用の仕方、註の付け方については、先輩の卒論・修論を読み、モデルとして利用する。

2-5 序論には必ず「研究の動機」「研究の方法」「先行研究の有無・動向」などが付いていなければならない。「授業書」などの教材作成の場合でも基本的には同じ。

3 共同研究

3-1 個人研究だけでなく「教材作成・授業書作成」のような場合は共同研究も認める。

3-2 共同研究の場合も、「形式」「内容」については、基本的には上記の基準に準じる。

3-3 ただし共同研究の「量」は個人研究の場合の1.5倍を基準とする。

3-4 共同研究の場合、草稿をセミナーに提出し皆に議論検討してもらう前に、必ず自主ゼミでお互いに検討しあってから提出する。

3-5 たとえ、共同研究でなくても、セミナー全員で自主ゼミをおこなってから研究室での討論に持ち込むことが望ましい。

4 留学研究

4-1 交流提携校への留学生の場合、自分の留学体験をまとめて卒業研究とすることもできる。

4-2 しかし、その場合も単に体験記に終わらせるのではなく、必ず参考文献その他で立証または補強する。

4-3 記録の仕方は時間軸に沿って展開するのが便利だが、ゆとりがあればテーマ別に展開するのが良い。

4-4 たとえ交流提携校への留学でなくても、外国での生活が長い場合、その記録と考察を書くことで卒業研究に代えることができる。

4-5 なぜなら、その海外生活で思ったこと考えたことは、その個人でしかできないことであり、それは読み手に必ず何らかの発見を与えるからである。

5 院生・留学生の場合

5-1 院生・留学生で「英語教育」「外国語教育」を研究テーマに選ぶ場合、自分の小学校時代からの「言語学習の記録」から叙述を始めることが望ましい。

5-2 なぜなら、自分の小学校時代からの「言語学習の歴史」を思い出しながら、それを詳細に記録することによって自然と研究テーマが見えてくるからである。それは同時に留学生の「母国の教育制度」を読み手に知らせることにもなる。

5-3 小学校時代からの「言語学習の歴史」を詳細に記録しようと思っても、当時の教育制

度がどのようなものであったか思い出せない場合は、それを調べ報告することが、既に研究論文を開始していることにもなる。

5-4 したがって、先ず「言語学習の歴史」を詳細に書くことができなければ、研究はスタートできないとも言える。つまり英文50枚のうち最低10枚以上の「言語学習の記録・歴史」が求められる。

5-5 残りの30枚は、そこで生まれてきた疑問を調べて報告しているうちに、いつの間にか達成されているはずである。APPENDIX (調査資料) やREFERENCE (参照文献) を論文末尾に付けていると最低基準の英文50枚は簡単に超えることができる。

5-6 全ての留学生が自分の「言語学習の記録・歴史」から叙述を始めたとしても絶対に同じ論文にはならない。なぜなら、誰一人として同じ人生を歩んでいないからである。違った学校に行けば学び方も違っているはずだし、たとえ同じ学校に通っていたとしても学び方は個性的だからだ。

5-7 国際理解教育を研究テーマに選んだ院生の場合も、「研究の動機」を書く際に、自分の生きてきた歴史が研究の動機・土台になっているはずだから、「自分史」から叙述を始めるのが一番書きやすいのではないだろうか。

(ただし国際理解教育を選んだ学生は日本語で書く可能性が高いので、その場合、必ず誰かに日本語をチェックしてもらうことが望ましい。)

かなり長い引用になりましたが、私が卒論・修論の合格基準についてどのような考え方をしているのか、その概略を知っていただけたかと思います。そこで以下に項を改めて「量」と「質」、「形式」と「内容」について、若干の補足をしたと思います。

6-2 卒論・修論の「量」について

前項では 卒論・修論の合格基準について、下記の「量的基準」を設けていることを紹介しました。

卒論 A4サイズ、40字×40行、英語25枚以上 (または日本語50枚以上)

修論 A4サイズ、40字×40行、英語50枚以上 (または日本語100枚以上)

このように設定した客観的根拠はありません。講座によっても指導教官によっても合格の基準が違いますから、私を指導教官に選ぶのであれば、これくらいの量を書く覚悟で来てください、と言いたいだけなのです。

とは言っても、この数字に全くの根拠がないわけでもありません。というのは、中間レポートでも量の上限を設けない場合、5-10枚を書く学生は少なくありませんでしたし、最終レポートでは10-20枚を学生も珍しくなかったからです。

中間レポートは3回以上 (3×5-10枚) ありますし、それに最終レポート (10-20枚) を足せば、これだけで学生たちは25-50枚を半期の授業で書いていることになります。だとすれば、1年間をかけて調査研究した結果が「50枚以上」というのは、むしろ少なすぎる言うべきかも知れません。

また参考文献についても「卒論10冊以上」「修論20冊以上」としたのも、正直に言うとお客観的な根拠はありません。しかし、幾つかの中間レポートを書いた後の1-2週間で、「最低3冊の本を読んでレポートを書く」という課題をこなしているのですから、1年以上もかけて「たった10冊」しか本が読めないというのは、むしろ恥ずべきことかも知れません。

また卒論にしても修論にしても、自分が調べてみたいと思っている研究について既にどのような文献があるのか (つまり「先行研究」) を調べておくことは、卒論・修論の出発点です。それどころか、この「先行研究」を読んで「要約」と「引用」「考察」を書いているうちに卒論・修論の締切になってしまうこともあります。

しかし、1年間に10冊以上もの本を読み、それについての「要約」「引用」「考察」を書き上げたことそのものが、かつて成し遂げたことのない偉業を達成したことであり、それだけでも満足すべきことではないでしょうか。まして1冊の本を読み、そこから生まれた疑問を次の本で解決していくとい

う連続作業そのものが、「驚き」と「発見」の連続であったとしたら、研究そのものが楽しみとなるはずです。

このような知的作業は修士論文の場合も全く同じです。博士論文の場合は、「先行研究」を踏まえて自分独自の研究を提示しなければ学位を得ることは難しいのですが、修士論文の場合も、卒業論文と同じように「先行研究」を追いかけているうちに提出期限がきてしまうことは珍しくありません。しかし20冊以上の本を読み切り、博士論文として追求してみたいと思える独自の研究課題（すなわち「価値ある疑問」）を見つけ出すことができれば、それで修論の目的は達したと言えるのです。

6-3 卒論・修論の「質」について

既にかいたように「価値ある疑問」を創り出し、それについて調べることが研究の評価に直結します。しかし問題は「どんな疑問が価値ある疑問か」ということになります。次に、この点について考えてみます。

自分で調べていて「驚き」と「発見」がある疑問でないと、調べていても楽しくありません。それが読み手（教師）にとっては既に知っていることであっても、書き手が楽しければ基本的には「内容のあるレポート」ということになります。

他人から押しつけられたテーマで嫌々に研究してしても「驚き」と「発見」があるはずはありませんし楽しくありません。ですから、そのような研究は自分にとって「価値ある研究」とは言えないでしょう。

また一步譲って、読み手（教師）にとっては既に知っている研究であっても、それについて調べたいと思った動機が読み手に生き生きと伝わり、また調べた結果が自分にとってどのように有意義であったかが読み手にはっきりと伝わるものであれば、それは必ず読み手にとっても楽しいものになります。

したがって、「序論」で、「研究の動機」が読み手に伝わるように、自分の体験に照らして具体的に書かれていて、しかも「結論」で、自分で調査・研究した結果の「驚き」と「発見」がきちんと書かれている研究が、「優れた研究」「優れた論文」ということになります。そこに「成長の証し」が現れているからです。

もちろん、既に中間レポートや最終レポートの節でも述べたような、「章」「節」「項」の番号の付け方や引用の仕方・出典の示し方が間違っているものは、それが「形式」として誤っているから価値がないのではなく、読み手にとっては非常に「内容」がつかみにくい論文になっているから評価が低くなるのです。

まして他人の書いたものをあたかも自分が書いたかのように「地の文」で引用することは、盗作と同じことで、倫理的にも決して許されないことです。私が「引用」と「考察」をきちんと書き分けるよう強く求めるのもこのような理由からです。最近ではインターネットからコピーして貼り付けることが簡単にできるようになりましたから、この点はどれだけ強調してもしすぎることはないでしょう。

これは「文章の引用」だけでなく、「図表や写真の引用」についても同じです。それを無断でコピーして自分の論文に貼り付けることは一種の「盗作行為」ですから厳に慎むべきです。しかしだからといって、常に自分で作った図表や自分で撮った写真を使わなければならないと言っているわけではありません。「図表や写真の引用」については必ず出典を明記しなさいと言っているだけなのです。

7 おわりに

皆さんの先輩の卒論・修論で、私が良いと思ったものは、私が編集し直して大学の研究紀要に載せてきました。私が岐阜県庁からの依頼で「ブラジル人労働問題懇談会」の座長を務めることになったのも、紀要論文を読んで感銘を受けたからだとか岐阜県の担当者が語ってくれました。それだけでなく「論説資料保存会」という東京の団体から「大学の研究紀要に載っている先生の共著論文を『教育学論説資料』〇〇号に載せたいから許可を欲しい」という依頼が毎年のようにあります。

また先日は米国の大学研究者から「先生の共著論文を英文の要約で読んだ。引用したいから発表さ

れた年を知りたい。また可能ならオリジナル論文を読みたいので入手方法を教えて欲しい」との依頼がメールでありました。これらは全てセミナーで議論してきたことの成果です。ですから私にとっては非常に嬉しい知らせであり、また論文作成者の誇りでもありました（彼女はベトナムからの留学生で、100枚を超える修士論文[英文]を書き、私が紀要で発表したのはその一部）。

しかし、このような「公のかたち」になるかどうかどうかは、本質的にはどうでも良いことです。何度も言いますが、要は自分が楽しみながら研究するのが一番です。「驚き」と「発見」のない研究ほど詰まらないものはありません。しかし、調査・研究に「驚き」と「発見」があれば、そして仕上げた論文を通じて自分の「成長の証し」が確認できれば、それは巨大な成果ではないでしょうか。

その論文作成で培われた学力は必ずや今後の人生を生きていく上で大きな支えになることでしょう。私のセミナーから育っていった多くの学生が、「今までこれほど勉強したことはなかった」「学ぶことの面白さが卒論・修論で初めて分かった」「あの時の体験が現在の仕事に生きている」と語っています。先輩の味わった充実感を皆さんにもぜひ体験して欲しいと思います。

参考文献

- 大西忠治『文学作品の読み方指導』（明治図書，1988）
 木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書，1981）
 寺島隆吉「母国語の書く力と英語の自己表現」（寺島1986：第1章第2節）
 寺島隆吉「文章の構造における日本語と英語」（寺島1986：第2章第1節）
 寺島隆吉『英語にとって学力とは何か』（三友社出版，1986）
 寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』（あすなろ社／三友社出版，1990）
 寺島隆吉『英語にとって評価とは何か』（あすなろ社／三友社出版，2002）
 寺島隆吉「実践研究論文の書き方」（寺島2002：第3部第5章）
 寺島隆吉『英語教育原論』（明石書店，2007）
 本多勝一『日本語の作文技術』（朝日選書，2004）
 ハワード・ジン『民衆のアメリカ史』（明石書店，2005）
 Howard Zinn, *A People's History of the United States: 1492 - Present* (Perennial, 2003)
 Howard Zinn & Anthony Arnove, *Voices of a People's History of the United States* (Seven Stories Press, 2004)
 Howard Zinn & Anthony Arnove, *Readings from Voices of a People's History of the United States* [DVD] (AK Press, 2005)
 Howard Zinn & Anthony Arnove, *Readings from Voices of a People's History of the United States* [CD] (Seven Stories Press, 2007)
 ノーム・チョムスキー『メディア・コントロール』（集英社新書，2003）
 Noam Chomsky, *Media Control: The Spectacular Achievements of Propaganda* (Seven Stories Press, 2002)
 寺島研究室HP「本館」 <http://www1.gifu-u.ac.jp/~terasima/>
 寺島研究室HP「別館」 http://www1.gifu-u.ac.jp/~terasima/translation_index.html